けいおん！　Black and Bitter！

わらびもち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！　Ｂｌａｃｋ　ａｎｄ　Ｂｉｔｔｅｒ！

【Ｎコード】

Ｎ５０３３Ｎ

【作者名】

わらびもち

【あらすじ】

最近共学になり、男女比率があるぇ★な事になっている桜高に入学する野之部　直人。彼は入学式の日、運命（？）の出会いをして…？期待を裏切りそうで裏切らない、でもちょっと裏切るどっかのラー油みたいな新人わらびもちの初投稿です。お時間のあるときにでもお読みください。

#1　廃部！＋運命！？（前書き）

この小説のタイトルに興味を示してホイホイやってきた方…すみません！！タイトルはてきとうに考えたものであって、内容はｂｌａｃｋでもｂｉｔｔｅｒでもありません。それでもおｋな方は、どうぞお読みください。どうぞ。

#1　廃部！＋運命！？

目を閉じている俺の周りに広がっているのは、何？

海。

冷たい、気持のよい水の感触が、肌越しに感じられる。
いつまでも、ここでじっとしていたくなる。

でも、それはできない。

時間は、決して止まる事はないのだから。

光届かぬ深海から、浮力という大自然の摂理に従って、ゆっくりと、
そう、ゆっくりと浮かんでいき、
水面からぷかっ…と顔を出すように、

自然に、目が覚めた。

「…朝、か……」

俺は何か考える事もなしに、部屋の天井を見つめた。

「今日から学校だな…」

そう、今日から俺の高校生活が始まるのである。いやなに、憂鬱というわけではない。むしろ楽しみなのだ。二週間の春休みは受験が無事終了し、やる事のない俺たちに遊べと言っているようなものだった。実は俺は、ずっと遊んでばかりいると「ほんとに今のままでいいのだろうか？」って思ってしまうマジメ人間のようで、この二週間ずっと悩んできたのである。

「まあ、そんなことはどうでもいいか」

時計を見ると、６時２０分を指し示している。ちょっと早いが、遅

刻よりましか。

もそもそと朝食を済ませ、着なれない制服を着る。

「…」

家を出るときにいってきます、は言わない。だっていってらっしゃい、って言ってくれる人がいないから。

「…ちょっと早く来すぎたかな…」

今日から俺の母校となる桜ケ丘高校は、3年前に女子高から新しく共学になったせいで、男子が極端に少ない。え、羨ましい？女子とほとんど話した事のない俺個人としては、むしろ嫌なのだが。まあ、それを志望理由にした奴を俺は約一名知っているし、そういう奴は実は結構居るんじゃないか？

…それは置いといて、

「どうするかな…」

入学式まであと小一時間。会場の体育館を覗いても、まだ誰も、用意された椅子に座っている新入生はいなかった。

それで、校門前に佇んでいるのである。

「暇だな…能登(のと)はまだか？」

待ち合わせをしていた友の予想以上の遅れに苛立つ。

ところで、人生に予想外の出来事ってよくあることだなーって、たまに思う。
この日俺に降りかかったのも、まさしくそれだった。

「わわっ！！危ないどいてどいてどいてーーーっ！！」

「ん？……のわぐはああっ！！」

突然横からぶつかってきた何かによって、俺の頭はしたたかアスファルトの地面に打ち付けられた。

「うああっ！！痛あっ！！」

誰だよ！！すごく頭が頭痛なんですけど！！

「あっ！！ごめんなさい、大丈夫ですか！？私、止まれなくて…」

（！？…女の子…？）

その可愛らしい声に反応してつい、顔を上げた俺の目に写ったのは…

「あのっ、大丈夫ですか……？」

女神、だった。

つぶらな瞳。その綺麗な眼が、動揺した様に俺を見つめている。

倒れた俺の体をゆすっているのは、見たことはないが、失われたミ

ロのヴィーナスの両腕を思わせる白い手。
活発そうな顔を飾り立てているのは、絹の様に柔らかそうな、茶色の髪。

俺的ストライクゾーンど真ん中、だった。

「あ、あの、本当に大丈夫ですか…？」

あ、いけね、黙ってたら分かんないよな。

ゆっくりと起き上がり、大丈夫、と一言言おうとして、

「だいｊｙ」

女神再臨。

どさっ。

「ええっ！？ちょ、ちょっと、ホントに大丈夫！？」

（駄目だ…まともに顔も見れない…）

もう…無理かも…

「勝手に死ぬな、直人（なおと）。おりゃ」

どご。

「いだっ！！脇腹がああ！！」

また激痛かよ！？

「ほら、そこのあんたも、のろのろしてると入学式が始まっちまうぞ。コイツはいいから、とっとと行った行った」

「え、あ、ありがとう…」

その娘は戸惑いながらも、走り去って行った。ついでに言うと、走り去る姿はとても華麗だったし、去り際に見せた遠慮がちな微笑も、とても輝いて見えた。

「ほら、さっさと行くぞ直人。自分で蹴っておいてなんだが、立てるか？」

この野郎は能登。俺が入学式の待ち合わせをしていた奴であり、前述した「それを志望理由にしている奴」である。
それにしても、見た目じゃ中身は判断できないという言葉を具現化したような奴だなーと、週に3日くらい思う。俗なやつなのに、見た目はただのナイスガイ（？）だ。

「やべ、あと7分で始まっちまう！！急げ、直人！！」

「ちょ、おま、ギブギブ！！」

ちなみ入学式にはギリギリ間に合った。

〜〜〜〜〜

こういう体育館でやる話に存在意義を感じられないのは俺だけじゃないようで、校長の話の中盤になると能登を始め周りの人達がすやすや寝息を立て始めた。その中で俺が校長の催眠攻撃に耐えられたのは、さっきの運命的（？）な出会いが頭を離れなかったからである。あの娘はなんて名前なんだろう…趣味はなんだろう…俺の頭はそんなことでいっぱいだった。ああ、また会えないかな…

～～～～～

会えたよ。

また会っちゃったよ。俺今日は寝れないよ。

「神様、ありがとう…」

今朝会ったあの娘は…俺の、３つ後ろの席に座っていた。

相変わらず…かわいいなあ…

「なにやってんだ直人。帰るぞ。から揚げ食いにいこうぜ？駅前に新しくできたんだって」

「……」

「何にやけてんだ、気持ち悪い…」

「……」

「もしかして、頭打っておかしくなっちまったのか？」

「…ちょっと黙ってくれ、能登。今すごく幸せなんだ…」

「…（大変だ…直人がおかしくなっちまった…）」

友達に本気で心配されているのにも気付かないくらい、今の俺は浮かれていた。

2週間後。

当然、俺と彼女の関係は進展することはなかった。だって恐れ多いんだもん。まあ、あと1年もあるんだし、いいんじゃね？

その昼休みのことである。

俺と向かい合って弁当を食っている能登が、直球な事を聞いてきた。

「お前、好きな女がいるだろ」

「ごふっ！！」

飲んでいた野菜ジュースを吹きそうになった。いきなりなんだよ。

「だってよ、最近よく溜息つくし、食欲もないし、約一名のほうばっかりみてぽーっとして、でもって溜息つくしさ。これが恋じゃなくてなんだってんだよ？」

「……」

「図星か…まあ、平沢はみてくれは悪くないが、頭が弱いんだよな…お前にはお似合いだと思うがな」

え、ひら…なんだって？

「はあ？お前、名前も知らなかったのかよ？ずいぶんと奥手だな…」

「いいからその娘の情報をくれ」

そう、コイツは、全校生徒の情報をいつの間にか集めきっていたのである。主にこういうとき、コイツと友達で良かったなと思う。

「急かすな…えーと、平沢（ひらさわ）唯（ゆい）。身長１５６センチ…」

「性格とかは？」

「だから急かすな。性格はドジッ娘で天然。楽器とかの特技は皆無、だってよ、…」

すげえ。性格まで好みだ。

「…はあ。どうせ声も掛けられないのに、何が性格まで好みだよ」

…何も言い返せん。

「まあいいけど。…それよりも、お前、どの部活に入ったんだよ？」

「んぁ？…まだ決めてないけど…それがどうｓ」

「はあ！？まだ決めてなかったのかよ！？もう学校はじまってから２週間もたってるぞ！？」

「そ、それは…」

「考えてみれば直人って、今まで女子と関わるのはなんか気が引けるからって、卓球部に入ってたんだよな…」

まあな…

「じゃあこの際、文化部デビューしちまえば？良い機会だし。華道部なんてのは？部員０人なんだってよ。確実に部長になれるぞ」

「…」

「どうせ運動あんま好きじゃないんだし、な」

「…考えとく」

「あっそ。あ、俺職員室行ってくるから。弁当のから揚げ、食っていいぞ」

「おう」

文化部……か。
どうでもいいが、あいつから揚げ大好きだな。

その夜、素晴らしい夢を見た。
平沢さんが、カスタネットを叩いてる夢だった。

〜〜〜〜〜

「今、何て言った…？」

翌日の朝、俺は激昂していた。なぜかというと、

「だから、お前の入部届け出しといたって言ったんだ」

だからである。

「なんでだよ！！」

「じゃあ、あと一週間以内に部活を決められんのかよ、優柔不断坊や？」

…何も言い返せん。

「大丈夫、軽音部って書いといたから☆」

「話の流れ的に大丈夫じゃねえよ！！」

「なら華道部が良かったか？軽音部のほうが、なんか、新入生が入

ったらしくて、あと2人集まれば廃部回避なんだってよ。廃部確定の華道部よか、まだいいじゃねえか」

「せめて、選択支をくれよ」

それ以前に、なんで廃部確定の部を薦めたんだよ。

「そんなことしても、お前ならいつまでも悩みかねないぞ？分かってると思うが、４月を逃したら部活に入りづらくなるんだからな」

それは…そうだが。

「見学だけでも行って来い。嫌だったら断らせてもらえ。もう一度言うが、これがラストチャンスだ」

「……わかった」

俺がそういうと、能登はこらえきれないように笑い転げはじめた。こんのやろう。

放課後。

「さて、行ってみるか」

今更だが、一人で行くのはなんか心細いな。べ、別に、寂しくなんかないんだからねっ！！…はあ。

「あ、野之部（ののべ）くん」

「山中先生」

そんなことを考えてたら音楽の山中先生に声を掛けられた。この先生、能登がいうには美人だし優しいしでそうとう人気らしいんだが、個人的にはグッとこない。え、じゃあ誰がいいかって？そりゃあもちろん平沢さｒｙ

「悪いんだけど、この箱を音楽準備室の倉庫に置いてきてくれない？」

「わかりました」

丁度行くところだし。

「ここか…ういーす」

お兄さんからのアドバイス。初めて訪れるところには、ためらわず突入したほうがいいぞ！

「お、いらっしゃーい」

俺に声を掛けたのは、奥の椅子に座った、前髪をあげた活発そうな女の子。対面には、黒髪の女の子。その隣に、金髪の女の子…って、全員女の子じゃねえか！！能登あのやろう！！

「何の用？」

前髪の娘が聞いてくる。さあ言え、部活見学に来ましたと！！

「えっと…」

「？」

「せ、先生から、これを置いてこいと言われました！！」

たまに、自分のへたれ具合に嫌気が差すときがあるよ。

「あ、そう。倉庫はあそこだから」

「あ、どうも」

そそくさと倉庫へ急ぐ。だって3人の視線がぐさぐさと刺さるんだもん。

音楽室倉庫に一歩足を踏み入れて思った。

汚い。

床はほこりまみれ、器具は散らばり、カオス感たっぷりだ。
ここまでひどいとやることはひとつ。

「いくぞゴミ共っ！！」

俺を満足させてみろ！！

作業を始めてから２０分。
倉庫掃除は、難航を極めていた。
やっと器具を片づけ終わった俺が次に目を付けたのは、

「床…」

そう、床だ。どうしてほこりまみれの床を歩きたがる人がいるのだろう、いや、決していない。

「…掃除用具、取ってこよ」

俺が倉庫と音楽室をつなぐドアのドアノブに手を掛けたとき、

再び、予想外の事が起こった。

ドアの向こうでバン！！と大きな音がして、

「みんなーっ！！入部希望者がきたぞー！！」

「本当か！？」

「まあ！！」

席を立つ音がして、

「ようこそ、軽音部へ！」

「歓迎いたしますわ！！」

「よおしムギ！お茶の準備だ！！」

「はいっ！」

なんと、俺のほかにまだ軽音部に入る人がいたとは。いや、俺はまだ入ると決めたわけじゃないが…。
あと今更だが、なんで俺、「何の用？」なんて聞かれたのだろう。
能登の出した入部希望の紙が届いていたのなら、真っ先に「入部希望者ですか！？」と聞かれるはずじゃないのか…？
それとお茶って何？ここ、何部だっけ？

だが、俺が驚愕したのはそのあとだった。

カチャッという、いかにもティーカップを置く音がして、

「どうぞ♪」

と、金髪の女の子の声。

その後の声は、前髪の娘のものでも、黒髪の娘のものでもなかった。

「おいしい…」

……ん？
今の声…

再びカチャカチャという音が聞こえて、

「おいしい～～☆」

間違いない。
もう一人の入部希望者は、…平沢さんだ。
あの、心を暖かくしてくれる声は、平沢さんだ。
聞き間違うはずがない。
でも、なんで軽音部に？

俺が困惑しているうちに、「好きなギタリストは？」とか、前髪の娘（以下前髪）達が聞き始めた。お、おい、平沢さんも困惑してるぞ。楽器経験もないのに、いきなりギタリストがなんたらとかやめてあげなよ。

その後、「平沢さんは、どんなギタリストがすきなの？」の質問から、「ジ」で始まるギタリストの名前がいくつか挙げられたが、俺はその中で一人も知らなかった。もっとも平沢さんも知らなかった

ようで、「あ…あは…は…」状態になっていた。

「平沢さんみたいな人がはいってくれてよかったな～」

「一週間以内にあと二人入らなかったら、廃部になるところだったんです」

「ほんっとにありがと～！」

…辞めづらっ！！

能登から聞いてはいたけど、すごく辞めづらっ！

「あ、あのっ！！」

ん？どうしたんだろう、平沢さん。

「申し訳ないんですけど、今日は入部するの辞めさせてくださいって言いにきたんです！！」

な、なんだってーー！！

3人も、

「「「へ？」」」状態になっていた。

「ギターは弾けないし、もっと違う楽器をやるのかと思って…」

いったいどんな楽器をやると思ったのだろう。カスタネットをやるとでも思ったのだろうか。

「じゃあ、何ならできるの？」

と、金髪（以下略）さんの声。

「かすた…は、ハーモニカ！」

今カスタネットって言い掛けませんでした！？

「ああ、ハーモニカならあるよ！吹いてみｓ」

「ごめんなさい吹けません」

……。

んで、それからの３人の態度は、どうしても平沢さんを引き留めよう的なものに変化した。だが、時間の問題だった。なんと、平沢さ

んが泣き出してしまったのである。
どうやら、期待させるだけさせといて、本当に申し訳ないと思ったらしい。なんていい娘なんだろう。

「じゃあ、せめて私たちの演奏だけでも聞いていって！」

泣きやんで、
「演奏してくれるの！？」
食いついてきた！

しばし待つと、演奏が始まった。この曲は音楽に疎い俺でも知ってる、翼をください、だ。
なつかしいな…と思っていると、いつの間にか、演奏が終わっていた。

（平沢さんの）拍手の音が聞こえ、

「えへへ…どうだった？」

俺は良かったと思うぞ。誰も俺に聞いてないが。

「なんというか……あんまりうまくないですね！！」

（バッサリだーーーっ！！）

「でも、すごく楽しそうでした！私、この部に入部します！！」

一瞬の間があって、

「ばんざーい！」

とてもうれしそうな声が聞こえた。良かったなあ、前髪さん達。

…ん？で、俺は？能登のやつ、俺の入部届け、本当にだしたのか？

ちょっと不安になってきた。

「でも、廃部回避のためにはあと一人居るんだよな…」

「そういえば、もう一人の入部希望者って、まだ来てないな…」

「えーと名前は、野之部　直（なお）さん…帰っちゃったのかな？」

バンッ

「なん……だとおおおおおおお！？」

気がつくと俺は、ドアを盛大に開け放っていた。「ああ、そういえばコイツいたな…」的な眼をした三人と平沢さんを華麗にスルーし、机の上の入部希望の紙を読む。

あの野郎…やりやがった…

そこには、俺の事が書かれていた。

「野之部　直」

名前以外は。

唖然とする俺に、前髪さんが

「いやいや、あんた直さんじゃないでしょ？」

「ああ、俺は…」

名前の欄に「人」の字を書き込む。

「野之部　直人ＤＡ！！」

その後、事情説明をして、みなさんにはなんとか理解してもらった。それにしてもさっきの事は、思い返すたびに恥ずかしくなる。あんなの俺じゃねえ。できれば、忘れてもらいたいものだ。

「…で？入部してくれんの？」

「まあ、入りますよ」

音楽は嫌いじゃないし、平沢さんもいるし　（ここ重要）。

「いよっしゃーっ！廃部回避だーっ！！」

「ねえ、ギターはできるの？」

「ん…ないですね…」

「え！？君もないの！？実は私もなんだあ！」
「あ…そ、そうなんですか…／／／」
やべえ。笑顔の平沢さん、最高にかわいい。
「そうだ！入部と同時にギターをはじめてみたらどうかしら？」
「いいな！私たちも分かるところは教えてあげられるし！！」
「え…いいんですか？」
「いいっていいって！私たち、もう仲間じゃん？」
「仲間……」
「そっ、仲間♪」

「ええっ！！結局軽音部入ったのか！？」
翌日の昼休み。自分で仕込んだくせに能登は驚いていた。
「いや、お前の事だから断ったのかと…」
「一時はそうしようかと思ったけど、でもこれから、楽しくなりそうだしな…」

後ろの、上機嫌の平沢さんを見る。彼女は、俺に気づくと手を振ってくれた。ひまわりのような、顔いっぱいの笑み。顔から火が出そうだ。

「そうか…まあ、がんばれよ…（やべ、マジでコイツ頭おかしくなっちまった）…」

友達の本気の心配に、俺はやはり、気付けなかった。

今はまだ、話す事さえままならなくても……いつか、この思いを彼女に伝える事ができますように。

#1　廃部！＋運命！？（後書き）

最後までこんな時間ばかりかけて書いた小説を読んでくださり、ありがとうございます。次話も投稿する予定ですので、気長にお待ち頂けると嬉しいです。皆様の感想等、お待ちしております。

#2　親睦会！＋仲間！？（前書き）

この小説を気長に待っていてくださった方（いるのか？）、なんとか2話ができました。はい、お察しの通り、オリ回です。やってもうた。ですが内容的には#2楽器！前篇的な感じです。

おKだな、という方はどうぞ。
駄目だな、という方もどうぞ。

直人「どちらにしろ読ませるんかいっ」

#2　親睦会！＋仲間！？

俺が軽音部に入部した、次の日の放課後。

「直人〜、から揚げ屋寄って帰ろうぜ？」

と言った親友の能登に俺は、

「絶対に嫌だ」

即答した。

「なんでだよ！？あそこ、結構美味いんだぜ？この前一緒に行ったろ？あの味を忘れたって言うのか？」

美味いからこそ、一時間も待たされたんだろうが。

「あれは、一時間待つ価値のある味だと、何度言えばわかるんだよ？」

バカ舌の俺には理解できないと、何度言えばわかるんだよ？

「しかも値段もお手頃ときた！！それなら、毎日食うしかないだろ？」

毎日から揚げだったら飽きるだろうな。

「ああもう！！じゃあせめて今日だけでも来い！！」

「俺、今日は部活に行かなきゃなんだよ。一晩で忘れたのか？」

「…ああ、そうだったっけか」

忘れていたらしい。

「でもよお、まさかお前が女子だらけの部活に入るとはな。もしかしてハーレムがよかったのか？」

そんなのいらん。落とすなら一人で十分だ。

「また平沢の話かよ…」

でもかわいいんだよ。どこがかわいいかというと、まずあのヘアピンがだな…

「はいはい、分かったよ。もういいだろ？昨日、帰ってから日付が変わるまで延々と電話で平沢の魅力について語りやがって。こっちは寝不足なんだよ」

「でもよお…」

「そんなに唯が好きなの？」

「ああ、あの綿菓子みたいにふわふわの髪とかももうグッと来て…ってあれ？」

あの、なんか三人目の声が聞こえたんですけど…

俺がビクビクしながら横をみると、そこにはクラスメイトかつ平沢さんの幼馴染の真鍋　和さんがいた。マズイ、今の会話聞かれてた！？いかん、なんとかしないと、俺が平沢さんを好きだという事がばれてしまう！！そうだ、ツンデレっぽく言えば良いんだ！！ネタとして流してもらおう！！

「べ、別にあんな可愛い娘、大好きなんだからねっ！！」

…あれ？

「哀れ直人…ツンすらできんとはな…」

「そっちも大変ね…」

「平沢の話となると目の色変えるんだよ。それがいちいちめんどいったらありゃしねえ」

「そうそう、唯もいちいち世話が焼けるのよね」

能登、意気投合すんな。ていうか俺が平沢さんを好きって事、ばれてる？

「ひどいよ和ちゃん！！私だって毎日がんばってるんだよ！？」

まったくだよな…ってうおい！！

「ひひひ平沢さん！？いつからそこに！？」

まさか今までの会話を聞かれてた！？

「え？今さっきだけど…」

じゃあ聞かれてないか。良かった。告白はどんな形だろうと、自分でしたいからな。↑ここ重要

「じゃあ唯、私先に帰ってるから。部活頑張ってね」

「うん。ばいばい、和ちゃん」

「お、じゃあ俺もお暇しようかな。せいぜい頑張れよ、直人」

「…おう」

どうやらあの二人は完全に意気投合したらしい。まさか一緒に帰るとは。

「…じゃあ俺も、部活行くかな…」

「じゃあ一緒に行こ！」

「のわあ！！」

いきなり平沢さんが身を乗り出してきたので、俺はびっくりして腰を抜かしそうになった。あぶね。

「同じ軽音部だよね？だったら一緒に行こうよ～。」

「あ、はは、はい／／／」

「？どうしたの？」

どうもしません。ただあなたが眩しいだけです。

「よし、行こう！」平沢さんが握りこぶしを掲げたので、

「お、おー…」

俺もなんとなくそれに続いた。

～～～～～

「で、音楽室ってどこだっけ？」

「ええっ！？」

～～～～～

「やっと着いた…」

「ごめんね…私が方向音痴なせいで…」

いえいえ、誰もあなたを責めてませんよ。

「えへへ。ありがと。じゃあドア開けるよ～…ってあれ？」

どうしました？

「引いても引いても開かない…どうしよ…」

「……」

俺は黙って、ドアを押し開けた。

「で、なんで今こんなことになってるんですか…？」

俺を含めた五人は部室の椅子に座り、目の前にはティーカップに注がれた紅茶と、ケーキが置かれていた。え？ここ軽音部だよね？練習とかはしないの？

だがそこは流石俺。女子相手に「おい、練習しろよ」なんて言える訳がない。そのくらい言えろよとか言う奴はデュエルしろよ。自分で言うのも何だが俺、結構強いぞ。

さて、ここら辺で人物紹介でもするか。

前髪をあげた娘は田井中　律さん。なにかと元気な人で、ムードメーカー的存在の人だ。

黒髪ロングの娘は秋山　澪さん。大人っぽい雰囲気の人だけど…恥ずかしがりで、血とか、痛い話や怖い話もダメらしい。

金髪ロングの娘は琴吹　紬さん。なんだかおっとりしてて、効果音で表すなら「ぽわぽわ」って感じ？

そしてマイエンジェル平沢　唯さん。その瞳はカラットなんて単位で測るのがバカバカしくなる程美しく、体育の授業中に見た肢体はクラスの誰よりもすらりとしていた。今は制服の袖の先から伸びる白魚レベルを遥かに超えた指先しか見えない　（だって顔なんてまばゆすぎて見れないからな）のが悔しくて悔しくて…え、もういい？すみません。

「今日は、みんなで親睦会をやろうと思います！！」

と、叫ぶ田井中さん。ぽわぽわと拍手をする琴吹さんと、おずおずと拍手をする秋山さん。

んで、状況が上手く飲み込めず、思考停止する俺、とマイエンジェ

ル。

「あの…親睦会って…？」

一応聞いてみた。

「親睦会だ！」

答えになってない。

「あの…秋山さん、これって…」

頼りになりそうな人に聞いてみる。

「わ、私も知らないんだけど…」

頼りにならなかった。

「り、律、これってどういうことだ？私、親睦会なんて聞いてないぞ？」

秋山さんが田井中さんに尋ねる。

「だって、今決めたからね★」

「なんだそれ」

秋山さんがツッコム。ああ、こんなポジションなのか、秋山さん。

「とまあ澪はほっといて、親睦会を始めます！！」

親睦会か……結局何をやるんだ？

「お茶飲んで駄弁るだけです！！キリッ」

「いつも通りじゃないか！！」

…え？秋山さん、今なんて？

「お茶の準備できたわよ～」

「…え？琴吹さん、今なんて？
まさか毎日お茶してるんじゃ…？」

「そっかあ…ナオくんはムギちゃんのお茶とケーキ、初めてだったねぇ」

「え？あ、は、はい…（あれ？スルーですか？ああそれにしても平沢さんかわいｒｙ）」

「おいしいよ！ほらほら、食べて！」

「あ、はい…」「なんで唯が薦めるんだよ…」

ぱくっ

！！！これは…うまい！！
甘すぎず、絶妙な……すみませんリポートは無理です。だって俺、グルメリポーターじゃないし。でも平沢さんリポーターならｒｙ

「そういえば平沢さん、野之部くん、もうギターは買ったの？」
ってあれ、いつの間に親睦会始まってんの？
俺が返答する前に、
「唯でいいよ！！」
と、平沢さん。
「私ももうすでに、澪ちゃんのこと澪ちゃんって呼んでるし！」
秋山さんはちょっとの間ためらったが、
「ゆ…ゆい…？」

「「……！！」」
やば、今のは…不意打ち！？
かなりキタぞこれ！まさか、この俺が平沢さん以外で興奮（？）するなど…
俺が混乱していると、平沢さんが、
「ナオくんも、私の事唯って呼んでいいよ！私、ナオくんの事ももうナオくんって呼んでるし！」
……ゑ？

今、なんと？

「だから、下の名前で呼んでいいよ？」

ま、マジですか…

「え、ええと、ゆ……ゆ、唯…？」

「ナオ、澪の真似か？」

「え？いや田井中さん、そんなつもりじゃ…／／／…ていうか、いつの間に田井中さんも俺の事名前で呼んでたんですか？」

「気付かなかったのかよ…」

「あ、そ、その、…スミマセン…」

「いや、いいけど…それよりも、私の事も律って呼んでいいぞ？」

「うぇ！？」

「私もムギでいいわ。そっちの方が呼ばれ慣れてるし…」
「え？あれ？…じゃあ、私も澪でいいよ…？……ナオ」
「はあ…でも律、そういうもんなんですか？」
「はいはい、敬語もやめるやめる！！私たち部活の仲間なんだから、そんなのいらないの！！」
「そうだよナオくん！堅苦しいよ？」
「は、はい…じゃなくて、うん」
「今回の親睦会の目的は、皆との交流だからな。大成功☆」
「へぇ～。ちゃんと考えてるじゃないか、律」
と、澪。
「馬鹿にすんなっ！！」
「ねえねえムギちゃん、ここ、やけに物がそろってるよね。最近の高校ってこんな感じなのかな？」
「ああそれは、私の家から持ってきたのよ」
「「「「自前！？」」」」
「はい？」
「ムギちゃんすごーい…」

それから俺達は、どうでもいいような話をして盛り上がった。思えば今まで、女子とまともに会話したことなかったような気がする。いや、そうでもないのかもしれん。

『先輩…』

「…」

一瞬脳裏に約一名の姿が浮かんだが、俺はそれを打ち消した。できることなら、あれはもう思い出したくない。

とまあ呼び方を変えるだけでグッと唯に近付けた気がする俺だったが、
ギターの事を忘れてはいなかった。ただ、一応澪あたりが言いだすのを待っていたのである。駄弁るだけの親睦会と言っても、軽音部なんだし、ギターの話くらい出るはず…

だが俺の期待していたセリフが澪の口からでたのは、それから小一時間後の事だった。

#2　親睦会！＋仲間！？（後書き）

続きます。
なんというか…やたら執筆に時間がかかるわー、どうしたもんかなー、と思っております。こんな感じなので次話も時間がかかるかと…

直人「こうやって読者を減らしていくんだろうな…」

わらび「お前はちょっと黙ろうか。事実だろうけど…」

#3　楽器！＋バイト！？（前編）（前書き）

わらび「やっと三話だぜ…」

直人「こんな駄文投稿するのになんで一週間以上かかったんだろうな？」

わらび「い、忙しかったんだよ…」

直人「この調子じゃ、最終話書き終える時にはお前社会人になってるな」

わらび「…反省してます」

直人「…いや、社会人になんてなれるのか？」

わらび「ちょっ、リアルに怖い事言うな！
それでは三話開始です！どうぞ！」

#3　楽器！＋バイト！？（前編）

「ムギちゃんのケーキおいしい～？」

「えへへ…ありがと。あ、マドレーヌもあるわよ～」

「ほほう、どれどれ？…おお、うまい！」

「じゃあ私も。…うん、いいんじゃないか？」

「ナオくんもどうぞ？」

「…ありがと」

現在４時１４分。俺のミッションは一向に果たせる気配がなかった。つまり、俺と唯のギターの話を話題にする、というものだ。まがりなりにも軽音部に入ったんだし、ギターくらい持っておかないと、な。逆に楽器を持ってない軽音部員なんて、ム○カの出てこない○ピュタのようなもんだろう。

マジメな澪あたりなら、そろそろ気づくと思ったのにな…どうやら俺は、澪のイメージを改めなくてはいけないようだ。ここまで忘れられているとなると、自分から仕掛けないとだめかもな。

合図的なものがほかに思いつかなかったので、俺は澪に視線を送ってみた。

（ギター、ギター、ギター…）

俺の視線に気づいた澪は、なぜか顔を赤らめた。なんか勘違いしてるっぽい。あんた、どこのみ〇るちゃんですか。
ああもうこうなったら、もういいや自分で言おう。

「あのさ…」

「「「「ん、何？」」」」

俺に向けられる女子四人の視線。なんかプレッシャー的なもんを感じるが、ここで言わないと男じゃねえ！さあ言うんだ野之部直人！

「いや…なんでもない」

俺の馬鹿あ！！なんで自分で言い出しといてやめるかな！？もう、

男、辞めるかな…いっそ秀吉になりたい。

「あ、そうだ！！唯とナオのギター！！ずっと忘れてた！！」

やっと気付いたか澪おおおっ！！！
長かった…そして澪に感謝だ。もし唯に惚れてなかったら、澪に惚れてたかもしれん。

「あ！！そっかあ！私ギターやるんだっけ？」

忘れてたんかいっ。だが可愛いから許す。

「軽音部は喫茶店じゃないぞ？」

あんたも忘れてたろおおおおおおおおおおおおお

「あ、でも、ギターっていくらぐらいするの？」

「うーん…安いのは一万円台からあるけど、安すぎるのはよくないからな…五万円くらいがいいかも…」

「「ごまんえんっ！？」」

唯とハモる＝貴重な体験だ。てか、諭吉さんが五人ですか…

「高いのは、十万円以上するのもあるよ」

『部費で落ちませんか？』

『落ちません♪』

唯さん、僕は恋に落ちました。

「とにかく、楽器がないと何も始まらないしな…」

「よっし！！今度の休みに、ギター見に行こうぜ！！」

あ。唐突に思い出した。自分家に、確かギターがあった気がする。

「あれ？そうなの？じゃあ明日持ってきてよ！」

「分かった」

あと音楽室倉庫にギターがひとつあったような気がしたが、なんとなく2年くらい後に発掘した方がよさそうだったので、黙っておいた。

「確か、この中に…」
帰宅した俺は、風呂に入って夕飯を食べると、早速押入れを調べることにした。なぜかというと、我が家の押入れには、四次元ポケット並みにいろんなものが入っているからである。我ながら便利な設定だと思う。

「！…これかな」
２０分ほど探すと、奥から黒いギターケースが出てきた。開けてみると、なかなか様になってるギターが出てくる。異常なほどたまっていたほこりを拭いて、肩から提げてみると、

「オレカッコイイ☆」
寝巻だけど。

翌日。
澪たちに発掘したギターを見せると、どうやらコイツ、なかなか高価なギターらしい。押入れで寝かせておくにはもったいないと言われた。だったら、使おうかな。

「そういえばゴルフクラブもあったな…ゴルフなんてやるつもりないし、売るか…」

「おお！それいいな！！」

「…なんで律がいうんだよ」と、澪。

「だってナオを説得すればそのお金を部費に回せるかもって痛っ！！」

「いい加減にしろ！！」ｂｙ澪

で、日曜日。

「あ、ナオ……早いな」

「あ、澪」
勢い余って約束の一時間前に着いてしまった俺に、澪が話しかけてきた。うーん、律やムギはともかく、澪はちょい苦手なんだよな。なんだか俺に遠慮してるみたいな…

「やっぱり一番乗りは澪かぁ、さすがだな」

「一番乗りはナオじゃないか…」

……墓穴掘った…泣

「え、ええと、今日はいい天気だねっ」

「ちょっと雨降りそうだけどな」
…ちょっと泣いていいですか？

「ナオ…私、聞きたい事があったんだけど…」
俺が落ち着くと、澪がポツリと呟いた。

「？何？ギターの事？」

「いや、そうじゃなくて…なんかナオが私…だけじゃない、ムギや律や、それから唯に…どこか遠慮してるような気がして…」

「！！」

「え…どうかした？…私の言ってる事、変かな？」

「いや、そうじゃなくて…俺も、澪をそんなふうに感じてたから…」

そうか。澪も、俺と同じ事を…

「……私、」

「ん？」

「今までまともに男の子と関わることがなかったから、接し方が良く分かんないんだ…ごめん」

思考がわずかな間停止する。

はあ……なんだ、そんなことか。

「はあ……なんだ、そんなことか」

「！！なんだよそんなことって！こっちは真剣なんだぞ！」

「いやあ、もしかして嫌われてるのかな～なんて、思ってたからさ。良かった良かった」

「それは私も思ってた。もしかしてナオ、いやいや入部したのかなって…もしそうなら、申し訳ないな、って…」

俺は澪が俺を遠慮しているもしくは嫌っていると思っていた。同時に澪は、俺が自分含め軽音部の皆を遠慮もしくは嫌っていると思っていた。
結果論を述べると、そういうことだ。今思うと、馬鹿ばかしくてしょうがない。

俺はわざとらしく溜息をついて、
「いいんだよ」

「…え？」

「接し方の話。自然体でいいんだよ。下手に気を使われると、逆にちょっと困るからさ」

「ナオ…」

ちょうどその時、俺は気付いた。
俺も女の子との接し方が分からない。でも、今、ちょっと分かった気がする。

自然体でいいんだ。

下手に気を使わなくていいんだ。

「……澪。」

「…？何？」

「ありがとよ」

「？」

「まあ奥さま、あそこにイチャついてる男女が…」

「若いっていいわね～」

「…で、そこ、何やってんの？」

後ろを振り返るとなんか律とムギがいた。本来なら澪がつっこむところだが、当の澪は「イチャついてる」に反応して頬を染めていたので代わりに俺がつっこんだ。そろそろ免疫つけといた方がいいん

じゃないか？俺も少し反応したが…

「ああそれは私も思ってる。おかげで出かける度に大変なんだよなあ。２００ｍ歩くたびに声掛けられるんだよ。澪ちゃんパワーか？」

ガチで澪がどっかの未来人の生まれ変わりの様な気がしてきた。

りっちゃんパワーもあるんじゃないか？と思ったが、口に出すのはやめておく。

「…あれ？唯は？」

いつの間にか集合時間になっていて、それでも唯の姿は見えなかった。不覚、一時でも唯の事を忘れるなんて…

「あ、皆～っ！」

噂をすれば。

「ゆｉ…はふうっ」

俺が振り返ると、そこには。

私服姿の唯がいて。

そしてそれがチート級に似合ってて。

…久しぶりに貧血を起こした。

流石にそれからは貧血ることはなかったが、唯の私服は本当に可愛くて、なんというか、制服の時は昼の朝顔で、今は早朝の朝顔って感じ。分かる？つまり、魅力度３０％アップ的な。あ、もちろん制服でも十分に可愛いけど、個人的には私服のほうがグッときて以下略。

「お金は大丈夫だった？」

「うん、お母さんに無理言って、五万円前借させてもらった！これからは計画的につかわなきゃ…いけないんだけど…」

「「「「？」」」」
不意に唯が立ち止まる。

「今なら買える…」と、ショーウインドーにへばりつく唯。

「こらこら！」
と律。俺も同感。今日はギター買いに来たんだろ？

「…！！」

「ちょっと見るだけ！」と言って店内に消えた唯を見た俺に、天啓が舞い降りた。
つまり、唯の私服が増える可能性が…！！

脳内で店頭の服を唯に着せてみる。やべえ、１２０点だ。もちろん１０点満点で、な。

…ていうかほかの三人もいつもまにか店内に入っちゃったけど…俺、入れないじゃん！！女性用服売り場に男一人とか無理っ！！

で、

ゲーセンなるところにはじめて行ってみて、金を食われまくった後。

俺達はファストフード店で昼飯を済ませていた。

「いや～、買った買った！」と律。

「次はどこ行こうか？」と唯。

なんかワクワクしてるムギ。

「「…」」

無言の、俺と澪。

「…あれ？何か忘れてるような…」

「「楽器だ楽器！！」」

澪とハモった。

やっとというかなんというか、楽器屋に行くことになった。少なくともゲーセンに行く前に俺がそのことを口にしていれば金の大量消費を防ぐことができたような気もするが、終わってしまったことはしょうがない。

「それにしても、ここら辺に楽器屋なんてあったのか」

独り言のつもりだったが、

「私と律は、家が近いからよく来てるんだよ」

澪が返答してくれた。

「へえ。…ところで、ギターの弦って確か定期的に交換しないとだ

めだったよな？」

「！よく知ってるな、ナオ」

「いや…昨日調べた」

なんだか返事がそっけない感じになる。なんでだろうな。

「じゃああのギター、もう弦変えたほうがいいかな？」

「そりゃそうだろ…ずっと押入れに入れっぱだったんだから…」

呆れられた。

今日はギター持ってきてないし、また今度来るかな。あ、でもどうやるんだろうな、ギターの弦の変え方なんて。

「だったら、私がやってあげるよ」

「！？…ありがと」

「……？ナオ、私、何かした？」

「いや…やけに優しいなと思って…」

「そう？…あ、唯も連れて行こうよ。一緒に変え方教えるからさ」

「…、そうだな」

なんだか澪に悪い気がしたのは、なんでだったんだろうな。

ひとつ、思った。
楽器屋、広っっっ！！
さすが、いろんな楽器を扱ってるだけはある…って、見渡す限りギターだらけなんですけど！？

「うわ～、すご～いっ！！」

少なくとも、唯は俺と同じ感想を抱いたようで、周りを見渡していた。
俺もそうしたかったが、ほかの客がいる手前恥ずかしいのでやめておく。
しかし、これだけギターがあるとどれを選んでいいか迷いそうだな。

「あ、そういえばギター選ぶコツとかあるの？」
思えば、ギターの事は澪に頼りっぱなしだな…今度、なんか奢ってやるか。

「もちろんあるよ。ギターって音色はもちろｎ」

「あっ！これ可愛い！！」

君の方がかわい…げふんげふん。
唯はとあるギターの前でうずくまった。どうやら、そのギターをよほど気に入ったようである。

できるだけ金を出してやろうと思ったが、そいつの値段を見てついため息をつく。

「それ……２５万もするよ」

「あっ！！ほんとだ！…さすがに手が出ないや……」

「…そのギターが欲しいの？」と、ムギ。

「うん」

「あっちに安いのあるぜ」

「うん…やっぱこれがいいなあ…」

…どうやら完全にこのギターの虜になってしまったようである。どうせなら俺の虜になって欲しｒｙ
しかし、２５万か…とても高校生の財布から出せる金額じゃないな…
なんか律が値切りについて熱く語っている横で、俺は考えていた。

……ん？高校生？
高校生ってことは、もしかしてあれができるのでは…

俺に本日二度目の天啓が舞い降りた時、律が叫んだ。

「そうだ！バイトしようぜバイト！」

ナンパしようぜナンパ！みたいに言われてもな…しかし、律にも天啓が舞い降りたとは。

「唯の楽器を買うために！」
腕組みをしつつ言い切る律。同じポーズでうなずく俺。
…そしてなぜか、俺の真似をするムギ。

「え、でも悪いよ、そんな…」

「いいって、これも軽音部の活動と思えばいいんだよ！」
「りっちゃん…」

「私もやってみたいです！」
「ムギちゃん…」

「俺も賛成、かな。一度、バイトやってみたかったんだよな」

「ナオくん……」

…いや、そんな目で見つめられたらやらざるを得ないよな。まったく、反則だよ。

しかし、俺は嘘を言ったわけではない。せっかく高校生になったんだから、高校生らしい事をしてみたかったというのもあったし、なにより中学のあの事を忘れる手助けになるかもしれない。

「よっしゃ、やるぞ！おーっ！」チラッ

…なんで俺をみるんだ律。乗れってか？

「おーっ！」

…なんでムギが乗るんだよ。

二人は楽しそうに「おーっ！」ってやっていた。

あ、そういえば…どんなバイトするんだろうな？

#3　楽器！＋バイト！？（前編）（後書き）

わらび「……あれ？」

直人「どした？」

わらび「おかしいな…だんだん澪ルート行ってるような…」

直人「皆様の感想、お待ちしております！」

わらび「ちょ、スルーすんな！

　ええと、まだ三話ですが、お気軽に感想を書いていただければと思います！」

＃４　楽器！＋バイト！？（後編）（前書き）

直人「…言い訳を聞こうか」

わらび「…申し訳ないとおもってます」

直人「いくらなんでも更新遅すぎだろ！何週間経ってると思ってるんだ！？しかもお前、もうすぐテストだろ！？」

わらび「だって、ムシ〇タのアニメを観ようと思ったら、いつの間にか全話観ちゃってて…」

直人「もういい。第四話、開始です！」

＃4　楽器！＋バイト！？（後編）

たいていの学生が憂鬱のなる、月曜の放課後。
だが、俺はとても元気だった。なぜなら…
「バイト？」
「ああ。唯のギターを買うために！」
「ああそうかい」
能登は「もう平沢の話はうんざりだ」と言わんばかりにとっとと帰ってしまった。
あの野郎、
唯のギターを買うために協力→好感度アップ
という素晴らしい俺の計画が分からんというのか。けしからん。

で、部室にて。
俺達は求人雑誌を広げ、バイトを探していた。
しかし、これがなかなか見つからない。募集が終了していたりとか、

額が足りないとかならまだわかるが、問題は澪であった。

「ティッシュ配りは？」

「…受け取ってもらえないかと思うと…」

「ファストフードとかは？」

「…舌噛みそう……」

「うーん…喫茶店とかは？」

「…オーダーが聞けない…」

…何というか、ここまでくるとかなりの重症だな。俺もある程度はわからなくもないが…

「他人と接することのないバイトか…」

考えてみると、そういったものは少ないなあ…バイトって、探すだけでもこんな疲れるのか…

俺が嘆息していると、律が声を張り上げた。

「これなんかどう！？」

「ん～？…交通量調査？」

なんだか地味だが、額も足りてるし、誰とも顔を合わせることもない。おお、なんかよさそう。

この案は全員一致で可決され、早速やることになった。

で、次の休日。
俺達は桜高近くの大きな道路脇に修造…いや、集合していた。
言うまでもなく、バイトをするためである。やっぱ交通量調査って地味…

「でもよく考えたら、二人しか要らないな、これ」
上りを測る人と下りを測る人の二人だ。

「じゃあ、二人ずつ交代でやろうか？」
澪の提案に、

「「じゃあ、はいはい！！私がやる！！」」

よく分からんが唯と律がやる気になった。

「あれ、ナオくんは？いいの？」

「ああ、まだいいや。ちょっと疲れたし」

最近、肩こりがひどい。なんでだろうな。

「「鞄が無駄に重いだけだろ」」

その瞬間、律澪に突っ込まれる。無駄とはなんだ。ちゃんと教科書とか入ってるんだぞ。

「じゃあ、なんで数学のない日に数学の教科書を持ってきてたんだ？」

それは…必要になるかもしれないからだよ。なんというか…あれだ、石橋を叩いて渡る、的な？

「そのうち叩きすぎて壊れるかもな、その橋。」

うっさい。

とまあ、そんなやりとりを終え、唯と律にカウンターを持たせた後。俺、ムギ、澪の三人は、とくにやることもないので歩道橋の下で休んでいた。唯と律から離れるわけにもいかないしな。

「それにしても…」

澪がなんか言ってるが、俺に向けられたものかどうかわからないので黙っている俺。俺は目をつむっているので、どうせムギに向かって言ってるのだろう。…独り言だったら怖いな…

「ナオは、ほんとうにもやしっ子だなあ」

「なんでいきなりもやしが出てくるんだ!?」

独り言より怖いわっ!!ついに作者が自然な会話の流れを考えつけなくなったのか!?

「え? いや、ナオってさ、体育の授業の後はいつも肩で息してるから、まさにもやしだなー、って」

…否定できない。

「登校して来るときもクタクタだし…」

…違う、言い訳をさせてくれ

「澪ちゃん、ちょっとナオくんが可哀想よ?」

おお、ムギナイスフォロー。

「ナオくんは、人より背が低いだけなんだから」

トドメさすなーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーっ！！

「ーーーーーーーーーーーーーーーーっ、はっ！！夢！？」

「あ、起きた？」

いつの間にか眠ってしまっていたらしい。見開いた俺の目には、歩道橋と、

そしてなぜだか顔が近い唯。ま、まさかっ、もうエンドロール！？って、まさかな。

「ほら、次は私とナオくんの番だよ。行こう？」

「…あ、ああ…／／／」

時計を確認してみると、もう昼近い時刻となっていた。ああそれにしても唯かわいいなぁ。

…っと、いけね、つい見とれてた。交通量調査やるんだっけ。

「ごめんね…私一人のために、バイトなんてさせちゃって…」

あらかじめ用意された道路脇の椅子に座るや否や、唯はそう言った。

「…別に。暇だったから」

恥ずかしいのに、なんかそっけない感じになる。

「ありがとう」

隣を向くと唯が微笑んでいた。釣られて、俺もぎこちない笑みを浮かべる。

「先にほかの三人にありがとうって言えばいいのに」

だからなんでそっけない感じになるんだよ俺。

「うん。皆にもありがとう、だね。さっき言ったよ」

どうやら俺が最後らしい。

「…って事は、ずっとここで測ってるの？交代しないの？」

時間的に、そうなるだろう。

「…うん。悪いから、ね」

「……交代してもらいなよ」

「…え？」

「無理しないほうがいい。俺達は軽音部の活動としてバイトしてるんだよ。唯へのボランティアじゃない」

心中とは逆の言葉を、俺の口は勝手に紡いでいく。

「べつに、無理なんかじゃ…」

「眠たそうだね」

「…！！」

「一時間ごとに、二人ずつ交代って律が言ってたじゃないか…」

「…っ」

一体何を言ってるんだ俺は。唯と二人になれて嬉しいんじゃなかったのかよ。
一緒に測ろうって、言いたかったんじゃないのか。
ただ…俺は…

唯のことが……優しすぎる唯のことが、心配だった。
たとえ、ただすれ違うだけの車の数を数えるだけでも、無理はさせたくなかった。
だからって、冷たくすることないじゃないか…俺。

そう自らを責める俺の耳に、
「そう…口で言ってくれればよかったのに…」

「…？」
唯のほうを向く。そこには、
俯いて、目元に涙を浮かべた唯がいた。

「曖昧な態度だったから…分からなかった。でも…ちゃんと言ってくれないとわかんないよ。ナオくん」

「…それってどういうーーー」
「ちゃんと『平沢唯が嫌いだ』って、言って欲しかった…」

「……！？」
思考が停止する。どういうことだ。いったいなんなんだ。
「本当は私の事、嫌いなんでしょ…？だから、澪ちゃん達とは違う態度をとってる…」

「…ちが」

「違うの？…違うんなら、何？ナオくんは…」

「私のこと…どう思ってるの？」

違う。

俺は唯が嫌いなんじゃない。

俺は。

唯。お前が、好きで……

俺の異常なまでに乾いた口は

弁明の言葉を、発することができなかった。

その後、俺達は一言もしゃべらなかった。
車の数をちゃんと測れなかったのは、申し訳なかったと思う。

もちろん、その夜は一睡もできなかった。

二日目。
俺と唯の間に生じた微妙な空気は、継続していた。まあ、そりゃそうだな。
なのによお。

昼過ぎ。
俺のクマのできてる目は、隣の、カウンターを持った唯をチラ見していた。
なんでまた、こんな気まずい状況なんだ？

「…」

「…」

だあああもう！！
なんか言ってくれよ唯…！

「…」

昨日はヘンな事言って悪かったなって、言わせてくれよ。
なあ…

「…」

俺がどんなに意味ありげな視線を送っても、唯は無反応だった。気付いてないのか、はたまた気付いてないフリをしているのか。分からない。

言葉で言ってくれないと…。

「なんか言ってくれよ」

「…！？」

また昨日と同じように、俺の口は勝手に動いていた。あわてて口を押さえるが、もう遅い、唯がこちらを見ている。しかたがないので、手を口から離す。もうどうにでもなれ。

「ちゃんと口で言ってくれないと分からないんだ。唯が、俺のことをどう思っているか…」

「ナオくん…私は…でも、ナオくんは…」

「『俺は、平沢唯のことが嫌い』」

「……！！」

唯ががっくりとうなだれる。…が、

「俺がそんなこと、いつ言ったんだよ？」

「…え？」

唯が俺を見る。

涙が出る一歩手前の目で。

「誰が唯を嫌うんだよ。嫌いなわけ、ないだろ」

むしろ、…

その先は、言葉にならなかった。突如、唯が地面に突っ伏したからである。

「！唯…？」

唯は、泣いていた。なんで泣いているんだ唯。お前は笑顔のほうが可愛いぞ？

「うう…ひっく…えぐっ…よかったあ…」

「…？」

「ナオくんが…本当に私のこと、嫌ってたらどうしよう、って…」

「…唯…」

どうやら俺の曖昧な態度は、あらぬ誤解を受けていたらしい。なんてこった。今すぐにでも謝りたいが、道行く日人達の目がイタい。

「若いっていいわねえ…」違うんです奥さんこれは違うんですていうかいいわねえって何がいいわねえなんですか全然理解できないですよ！！

「ねえ、ナオくん…」

「…？何、唯？」

気付けばパトロール中の警官さんもこっち見てるし！ああもうどうすればいいんだよ！

「これからも、よろしくね？」

振り返ると、笑みを浮かべ、こちらに向かって手を差し出す唯がいた。

「！…ああ、よろしく」

俺はそっと、唯の手を握り返した。

「能登！聞いてくれ！ついにボディタッチまで到達…っておい、切るな！」

時刻は夜。俺は能登に今日の報告をしようと…思ったら、今に至る。

「はあ…」

俺は机の上に無造作に置かれた封筒を見つめた。数時間前、唯に渡したバイト代だ。結局、「悪いから」という理由で返されてしまった。まあ、全員のバイト代を足しても２５万には到底届かなかっただろうが…

「はあ…」
こんな調子で文化祭のライブができるのだろうか。せめて、明日寄った時にまだあのギターが売れ残ってる事を祈ろう。

で、翌日。

「あ、あった…」
唯が歓喜の声をあげた。

唯が目をつけたギターは、未だ楽器屋に置いてあった。…値段が値段だしな。
でも、２５万なんて集まるわけないしなあ。どうやって買うつもりだ？

「もっかいバイトする？」
律が提案する。確かに、それくらいしか方法ないよな…

「え？…いいの？」

「いいっていいって」
このペースでいったら、ギター買うころにはもう一学期が終わってる気がするが、それでもやるしかない。
こうして俺達は、再びバイトをすることになった。

と、思ったら、
「あ…ちょっと待ってて」

とムギがレジへ駆けていく。どした？
彼女は店員と何か話していたが、しばらくすると戻ってきた。なぜか店員が涙目なのは、この際気にするまい。
「このギター、五万円で売ってくれるって！」

…なんですと？

「…マジで？」

「はい。マジでです！」
俺の脳裏にとある疑問が浮かんだ。
「でも、どうしてこんなに安く？」
五分の一だぞ…？

「このお店、父が経営してるの」
屈託のない笑顔で答えるムギ。
「…まさか、値切ったの？」
恐る恐る尋ねる俺。
「はい！」
再び笑顔で答えるムギ。
チラリとレジ店員を盗み見る俺。
未だに半泣きの店員。

ああ、なるほど。そういうことか…。

こうしてギターを手に入れた唯。おそらく、彼女は毎日練習を積み重ね、ぐんぐん腕を上げるのだろう。

反面、あまり練習ができてない俺。それは、コードなる暗号の解読等ができないのも原因だ。

「しかも、コードが読めるようになっても、もっと練習できなくなるかもな…」

俺は自室のベッドに寝そべりながら、カレンダーの、今日からちょうど二週間後に付けた赤いマーカーの日付けを見た。

学生の宿敵、テストである。

ああ、明日の予習、やってないや…

そう思いながら、俺は目を閉じた。

＃４　楽器！＋バイト！？（後編）（後書き）

わらび「…あれ？」

直人「俺もおかしいと思ったよ。なんでまだアニメだと二話なのに、もう四話終わってるんだ？」

わらび「それは、俺がｇｄｇｄの天才だから（キリッ」

直人「開き直るな！

…えーと、こんな作者ですが、更新がんばります。よろしくです」

わらび「実は今深夜で頭が朦朧と…」

直人「午後１１時３０分でか？」

わらび「俺から見ればもう深夜なの！

…とまあ、こんな作者ですが、是非、感想を頂けたらと思います！

では、また更新できる日まで！」

#5　特訓！＋結束！？（前書き）

『わらび「では、また更新できる日まで！」』

直人「あれから何カ月経ったんだよ！！お前この冬何してた！？」
わらび「ムシ〇タのアニメでの失敗は痛かったなあ…原作はあんなに神なのに」
直人「聞けよ！！」

#5　特訓！＋結束！？

「……」

現在、音楽室。我々軽音部は、いつものようにお茶を飲んで駄弁っていた。

「……」

この無言は俺だ。ほかの部員…つまりオデコとおっとりと姉御と目に入れても痛くない麗しきマイプリンセスは談笑している。

「……」

なんかデジャブ。某親睦会を思い出す。

「……」

やはり、澪も気付いてない様子だ。

「……」

そう、

「今日からテスト一週間前なんだ！」

俺は立ち上がって叫んだ。

唯がなんとなく拍手をしてくれる。…照れるな。

「…だからなんだよ？」

と、律。あんた部長だろ。

「…あ、お茶のお代わり要る？」

と、ムギ。違う違う。

「…テストかあ…、勉強しなきゃな…」

と、澪。

「ええそうです、テスト一週間前ですね」

俺は言い放つ。

「確かに一週間前だから勉強はしなきゃだけどさ…それが？」

と、律。

「それが？…だって？マジで分かんないんですかあ？一週間前ですよ？」

そろそろ限界だぞ。

「うーん…何かあったかしら？」

「コレだよコレ！！」

俺はふがいない部長に、生徒手帳の一ページを開いて見せつけた。

「ナニナニ…『テスト一週間前から、部活動を禁止する』？ってやばっ！私ら普通にお茶飲んでんじゃん！」
やれやれ…やっと気づいたか…。

「私、それ明日からだと思ってた…」
青くなる澪。

「じゃあ片づけなくちゃかしら？」
マイペースなムギ。

「ん～、おいし～☆」
全く話を聞いていない唯。

こんなんで大丈夫なのか、テスト…。

一週間と、数日後。

テストの結果が返って来た。

「時間がたつのって…早いなあ…」

「何言ってんだナオ？」

っと。

俺は感慨にふけっていたのを、現実に引き戻された。ちなみに今、俺らは音楽室で一週間ぶりのティータイムを楽しんでいた。…なぜかまだ唯が来ていない。嫌な予感。

「…やっほー」

「お、噂をすれば…って、唯？」

不意に現れた唯は、俺の嫌な予感をさらに加速させる（笑）を浮かべていた。

「ゆ、唯…テスト、どうだった？」

「…あ、あはは…」

唯が掲げた答案。

その右上には…12点、と赤で記されていた…。

「赤点取ったら追試だなんて、ちょっとやりすぎだよな…？」

「うん、大丈夫だよナオくん、気にしないで☆」
どうやらムギによるお菓子作戦は効果抜群のようだった。唯は元気を取り戻したようである。それにしてもずっとギターの練習をしていたとは…やるな。

「そういえば赤点取ったのに、部活出て大丈夫なの？」

「うん。追試で合格点取るまで部活でちゃダメだって」

なら平気だな……っておい！！確かに練習すらマトモにしてないけどね！！一応部活なんですよ！？

俺のツッコミは、澪が代弁してくれた。
「つーか唯、こんな調子で追試、大丈夫か？」
心配そうに声を掛ける律。その通りだ。追試まで赤点とったら…

「…とったら、どうなるの？」

「…『所属している部活動への無期限出席停止』…」

「！そんな…」
青ざめる唯。当然だ。クラスが違うと、その人とは部活くらいでしか会う機会がない。俺はともかく、三人に会えなくなるのが辛いのだろう。

「…大丈夫、応援してるぜ！」

「…りっちゃん…」

「…またここでお茶しましょ？」

「…ムギちゃん…」

「…そうだな。健闘を祈るよ」

「…澪ちゃん…」

ん？次は俺？

「……何言えばいいのか分かんないケドさ、…とりあえず、

合格点に向かって、全速前進ＤＡ！！」

その後、解散になった。やっぱり、俺の社長発言が悪かったのだろうか？

追試前日。
「はやっ！！」
「…どうした？」
いやなんでもない！！ただ作者のＴＥＫＩＴＯＵに呆れただけだよ！
「…それにしても、唯大丈夫かな…」
その瞬間。
音楽室のドアがふっ飛ばんばかりの勢いで開けられ、
「ナオくううううん勉強教えてええええええええっ！！！！」
『無視すんなゴラアアアアアアア！！』みたいな感じで小動物の様な唯が俺の腹に飛び込んできて。
そのまま、俺は意識を失った。

「……はっ！！」
「あ、起きました？」
俺が起きると、そこはみた事もない部屋だった。そして、なぜか布団で寝ている俺を、マイエンジェル唯が見降ろして…いや、違う！眉毛がちょっと細いしなによりおっぱ…胸部がなんかボリュームうpしてるような…
「えっと、貴女は…？」
「あ、珍しいですね、初対面でお姉ちゃんと間違えない人」
その人はにっこりとほほ笑んで答えた。
ゑ？…お、お姉ちゃん…！？
「えと…まさか、唯の…妹さん…！？」
「はい」

一卵性双生児かあんたらわ！！とか心の中で突っ込んでいたところに、

「あっ！！ナオくん起きた？さっきはごめんっ！！！」
ドアを開けて俺の嫁（脳内）が部屋に入ってきて――――

「あ、唯――――うおあああああああああああああああああああああああ！！！！」

再び俺に飛びつこうとして、「もう一回ナオを気絶させる気か！！」と澪に襟首を捕まえられて、「ぐえっ！」っとなっていた。
あ、あぶねえ…いくら唯でもあんなの何度も喰らったら…
男子高校生を一撃で撃沈させる唯タックルは、繰り返せば致命傷になる事間違いなしだろう。

「あの…妹さん。そういえば、ここはものすごく平沢家のような気がするんですけど、実際どうなんですか？」
ポニーテールの妹さんは苦笑して、
「憂って呼んでください。そうですね…じつは軽音部にみなさんが、気を失った直人さんをうちまで運んできてくれたんですよ。どうせ一緒に勉強するからって」

俺は振り返って、
「澪さん？あなたの脳内には『保健室に連れていく』って選択枝はなかったんですか…？」
澪は露骨に目をそらした。

「…はっ！！そうだ、お父様とお母様は！？」
これは重要な問題である。こんなふうに玄関でのやりとりとかがスキップされてしまうと、俺が毎晩のように考えている『ご両親に挨拶』合計１２６パターンが全部無駄になって――――

「二人とも今旅行に出かけているんですよ」

――――ならなかった。セーフ。

「お父さんもお母さんも、旅行に行く度に『新婚旅行』って言ってるよね～」

唯が天使…いや、女神の笑みを浮かべる。ラブラブ夫婦か…いつか、俺も…

「ナオも意識が戻ったようだし、そろそろ勉強始めないか？」
俺の思考を断ち切るように澪が言った。
「あ、じゃあ後で麦茶とか持っていきますね」
「ああ、どうも」

階段の一段目に足を掛けた姿勢のまま、憂ちゃんを振り返る。

…よくできた妹だな。

「澪ちゃん、ここどうやるの～？」
「ああ、ここはこう代入して…」
「……」
四角いテーブルで、熱心に教える澪と、マジメに数学に取り組む唯。
その対面に座った俺は、そわそわとＴＨＥ☆挙動不審していた。なぜって？ここが唯の部屋だからに決まっているじゃなイカ！
なんだかんだで侵略されてる俺は、部屋を見回す。
可愛らしい壁紙を見ると、うろうろしている律が目に入った。
ちょこんと鎮座している本棚を見ると、漫画を選んでいる律。
ベッドをチラ見すると、ゴロゴロしながら漫画を読みつつ、笑っている律。
…おかしいな。律しか見えない。

俺が目をこすっているうちに、澪が邪魔者オデコを部屋の外まで連行していった。その後姉御と不法侵入者との手に汗握る攻防があったが、ここでは割愛させて頂く。

さらに言うと、能登と真鍋さんがやってきてくれて、能登の買ってきたからあげ十人前を一目みて皆一様にどん引きし、あげくのはてには全員から無言の視線を送られた俺が仕方なく平らげ、胃袋が突然の来訪者に内乱を起こした結果となった。
「どうだ直人、美味いだろ！美味いよな！だってあのから揚げ屋の味だもんな！」
能登、いつか泣かす。

結論。
あんだけ騒いだ割には奇跡のような量を唯はこなし、お開きとなった。がんばれ、唯。

「…はっ！！また時間が飛んだ！！」
「どうしたナオ！？いつも以上に挙動不審だぞ！？」
律に突っ込まれる。…それ以上にいつも以上って何！？
「そういう律だってオロオロしてるじゃん」
「わ、私は、別に…」
慌てる律をスルーし、チラリと澪を見る。

どこかボーッとしている。そりゃ不安だよな。唯がいなくなったら部員四人で、廃部だし。

「で、ムギさん？」

「何かしら？」

「なんで、鞄を頭に乗っけているんですか？」

そう、なぜかムギは皆の鞄を頭に乗っけ続けていた。…って、それ俺の鞄！！絶対バランス崩すって！！重量的に！！

「平気よ？」

そういうとムギは、俺の鞄を乗せて、バランスを保った。おおスゴイ。何がスゴイかって、君の首がそれの重さに耐えられたことだよ！

まあ、ムギも唯が心配で挙動不審なんだろうな。

凶器（俺の鞄）からムギを救出しつつ、俺も心配になる。本当に大丈夫なのだろうか？いや将来の伴侶（希望）としては信じてやりたいが、でも…

その時。

部室のドアが勢いよく開いて。

俺の決死の覚悟での回避も間に合わず。

「ナオくううううううううんやったあああああああああああああ！！！！」

「またかよぶあああああああああああああああああっ！！！！」

…あとで知った事だが、唯はなんと１００点を採ったらしい。

やればできる子だな。

#5　特訓！＋結束！？（後書き）

わらび「さあて次回はいつになる事やら☆」
直人「あまりに時間がたち過ぎて原作を忘れかけてるからな…」
わらび「久しぶりの投稿となりました。これからもこの駄餅を優しく見守って頂けると嬉しいです！それでは！！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5033n/

けいおん！　Black and Bitter！

2011年5月4日10時00分発行